



秋田県八峰町
手這坂集落在住

木村 友治さん

KIMURA Tomoharu

周辺の森からたきぎを集め、自然の恵みを利用した生活を実践



今日本に目を向けると、昔から伝わる“知恵”が消え、農業に携わる人が減りつつあります。パラグアイの生活を経験して、自分の生まれた国で、自然と共に生きる生活を一から始めたいと思いました。帰国後は、過疎化が進み10年以上無人だった秋田県の手這坂集落に移住しました。築100年以上のかやぶきの家が残る村はまさに日本の原風景。パラグアイでは物が壊れたら自分で直すのが当然だったように、周辺地域の人々に助けられながら家を直し、田んぼや畑を作っています。

日本に根付く生活の知恵を受け継ぐことで“豊かさ”を取り戻す。今後は、田植えなどの体験教室を開き、日本の子どもたちに農業の大切さを知ってもらいたいです。

パラグアイの小学校では敷地内に菜園を作り、子どもたちに食の大切さを教えた

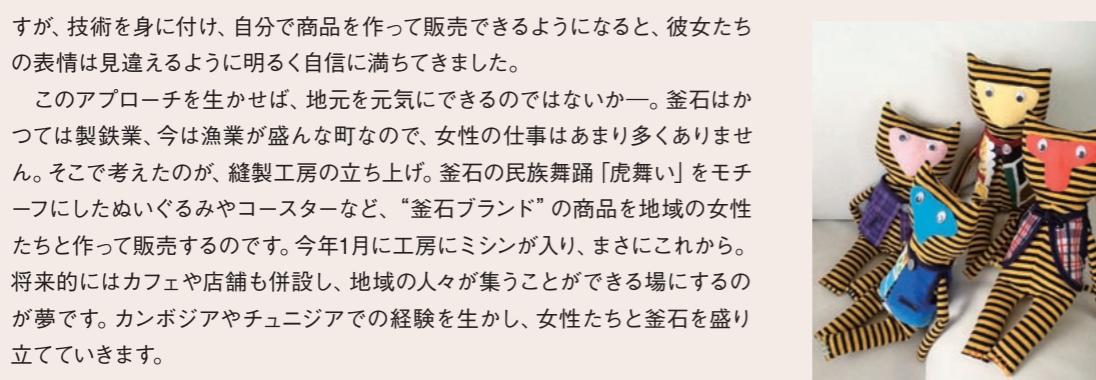
ものづくりの力で 釜石の復興を目指す

私の故郷、岩手県釜石市に甚大な被害を与えた東日本大震災。津波で何もかもなくなってしまった町を見て、復興のためには地元の人たちが働ける場が必要だと直感しました。日々の暮らしを支えるには収入が必要ですし、働くことが生きる力にもなるからです。

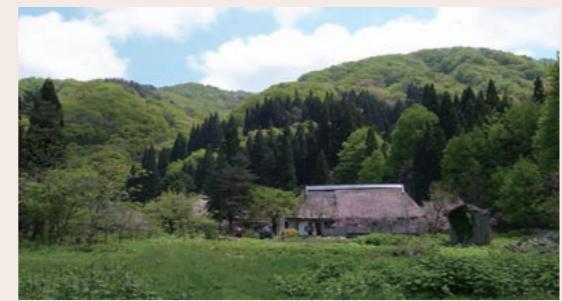
そう確信できたのは、カンボジアやチュニジアでのJICAボランティアの経験があったから。現地の職業訓練校の教員などを対象に縫製技術を教えたのですが、技術を身に付け、自分で商品を作って販売できるようになると、彼女たちの表情は見違えるように明るく自信に満ちてきました。

このアプローチを生かせば、地元を元気にできるのではないか。釜石はかつては製鉄業、今は漁業が盛んな町なので、女性の仕事はあまり多くありません。そこで考えたのが、縫製工房の立ち上げ。釜石の民族舞踊「虎舞」をモチーフにしたぬいぐるみやコースターなど、“釜石ブランド”的商品を地域の女性たちと作って販売するのです。今年1月に工房にミシンが入り、まさにこれから。将来的にはカフェや店舗も併設し、地域の人々が集うことができる場にするのが夢です。カンボジアやチュニジアでの経験を生かし、女性たちと釜石を盛り立てていきます。

★釜石マダムミコ工房のホームページはこちら→kamaishimikko.com/



商品の一つ、釜石に伝わる虎舞いをモチーフにしたぬいぐるみ



帰国後に移り住んだ手這坂には、日本の原風景が広がる

農業の視点で“豊かさ”を受け継ぐ

25歳から学び始めた農業を通して、世界の人々と触れ合い、自分の視野を広げたい。その舞台として選んだのが青年海外協力隊。派遣国のパラグアイでは、農業高校や地域の農家、小学校などで有機農業のノウハウや食育を指導しました。現地の人々と“同じ釜の飯”を食べて過ごすうちに、家族や地域の人々と支え合い、自然と触れ合いながら暮らす生活こそ、真に豊かなのではないかと感じました。

今の日本に目を向けると、昔から伝わる“知恵”が消え、農業に携わる人が減りつつあります。パラグアイの生活を経験して、自分の生まれた国で、自然と共に生きる生活を一から始めたいと思いました。帰国後は、過疎化が進み10年以上無人だった秋田県の手這坂集落に移住しました。築100年以上のかやぶきの家が残る村はまさに日本の原風景。パラグアイでは物が壊れたら自分で直すのが当然だったように、周辺地域の人々に助けられながら家を直し、田んぼや畑を作っています。

日本に根付く生活の知恵を受け継ぐことで“豊かさ”を取り戻す。今後は、田植えなどの体験教室を開き、日本の子どもたちに農業の大切さを知ってもらいたいです。

釜石マダムミコ工房

川村 美也子さん

KAWAMURA Miyako



釜石の工房で商品を作る川村さん(中央)。「JICAボランティア時代に培った周りの人を巻き込む力の大切さを実感しました」

その汗と涙が “今”的力に

JICAボランティアとして過ごした日々。

数々の困難や壁を乗り越え、現地の人々と共にした喜びは、彼らの“今”的力となっている。



海外のスタッフに部品の状態を検査する技術を教える菊田さん(中央)



菊田さんから学び、ジンバブエの技術者の間では整備技術に対する意識が高まった

菊田 聰さん

KIKUTA Satoshi

ヤマハ発動機
株式会社

機器を大切に使う技術を伝える

自動車整備士として働いて5年。その技術を生かし自分を成長させたいと思っていた時、友人に勧められたのが青年海外協力隊でした。

派遣国はアフリカのジンバブエ。私の活動内容は、ジンバブエ運輸省陸運局で車検用の機材を維持管理すること。しかし、肝心の機材が壊れてまったく動かないという予想外のスタートでした。自分でできることを探さなくては—。英語で交渉したり、配属先の公用車の定期点検の方法を伝えたりと、がむしゃらに駆け回った日々でした。今思えば、順風満帆ではなかったからこそ、何事にも臨機応変に対応する力が身に付いたと思います。

海外で働くための国際感覚やタフさ、チャレンジ精神など、学ぶこの方が多かった協力隊。もっと海外にかかわっていきたいと、帰国後はヤマハ発動機株式会社に就職しました。これまで約30ヵ国を飛び回り、市場調査をしたり、販売代理店のスタッフに商品の修理・維持管理方法を指導したりしています。

海外のスタッフと仕事をすると、日本での“当たり前”が通じないことも多い。それは協力隊での活動中にもよくありました。国境を越えて信頼関係を築くためには、相手の文化の違いを理解し尊重することが大切。協力隊で得た学びを今も実践しています。